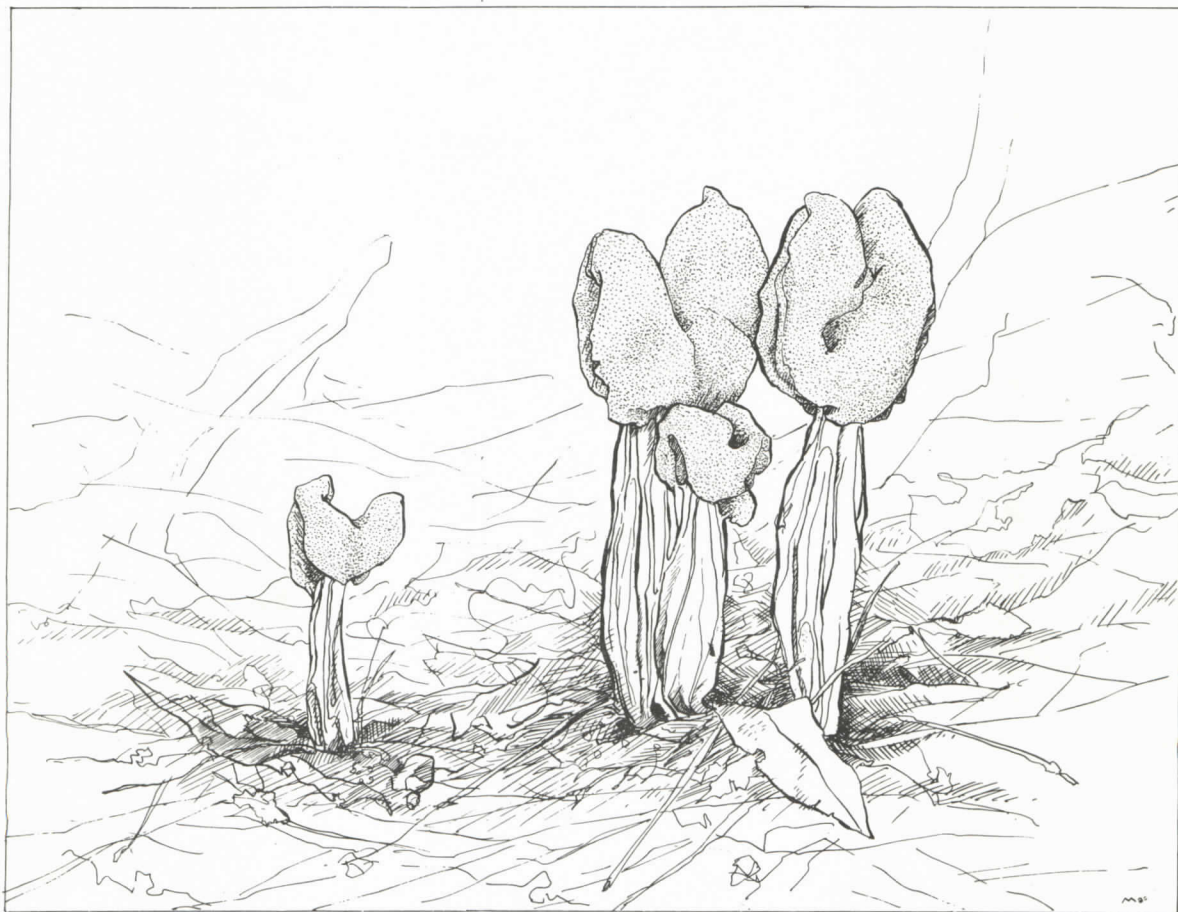


# 関西菌類談話会会報

1987年11月 No.2



神戸市立森林植物園 1987. 6. 28 クロアミガサタケ (図・丸西靖恵)

*Helvella lacunosa* Fr.

クロアミガサタケ (ノボリリュウ科)

子のう菌には奇妙な形をしたものが多くみられますが、このきのこもそんな仲間の1つです。

頭部は鞍形で、時に不規則につぶれたり、めくれあがったりすることがあります。黒色が普通ですが、もう少しすい色のものもみられます。子のう胞子は頭部の表面に形成されます。茎部には縦方向に深くえぐれた特徴のある紋様が見られます。

和名からアミガサタケ科 (Morchellaceae) の仲間と間違えるかもしれませんが、頭部の形がアミガサタケ類とは異なります。『チャワンタケに装飾的紋様の柄をつけて、チャワンの内側の部分を外側にめくってみれば、クロアミガサタケになる』というのはすこし乱暴でしょうか。しかし、チャワンタケとも、科が異なります。

六甲山の森林植物園で1987年6月27日に採集したものです。少なくとも毒きのこではありませんが、食べる元気が湧いてきません。

(森本繁雄)

# 林業技術としてのマツタケ栽培

伊 藤 武

マツタケの研究も長く続けると、だんだんややこしくなってくる。西日本の主産府県の林業試験場でマツタケの共同研究が始まったのが昭和42年であるから、実に20年間も続けていることになる。その間どういう訳か日本列島のマツタケ生産は確実に減産しており、昭和61年秋には「史上空前の凶作などと新聞の見出しに出る始末である。研究の成果は何等生かされてはいないではないかという冷酷な声もちらほらと聞えるご時勢である。このような研究環境にもめげず、なおマツタケの研究を続けている府県が多く、京都府もその一つである。今更引下る訳にはいかない、今年こそきっと良い成果が、と張切って意気込むが、実は内心は冒頭の心境なのである。

「マツ林の全てが判明すれば、マツタケも自ずから判明する。道は如何に苦難に満ちていても吾々はこの正道を進まねばならぬ(1964・2・13)」と今はむき浜田稔博士は、マツタケに対する研究姿勢を私達に示された。それから20年が経過した。果して正道を歩んできたであろうか。

京都府林業試験場の試験林(1.0ha)には1万数千本の色針金の子実体の発生跡地に打ち込まれている。山を這い廻り、なめるようにして調べた植生やきのこ等の膨大な野帳もある。20年間の苦難の産物である。研究の成果としてアカマツ林の環境調節を柱としたマツタケの林地栽培技術が編み出された。適地・適齡のアカマツ林に雑木の間伐や摘芯、地表堆積物のかき取りを行う。その後も保育管理を計画的に続けると、3~5年後に初シロが形成される。この技術は「マツタケ山造り」と称され、京都府内一円に急速に普及され、昭和61年秋までに500ha近い施業地が誕生するまでに至った。施業の効果も順調に現れ始め、5年以上経過した施業地では47%の山からマツタケ発生の際報が届いている。

これが林業技術としてのマツタケ林地栽培である。確かに農山村の近代化によって農林業としての利用・用途の道が非常に険しくなったアカマツ林をマツタケ山に甦らせ、特産地を育成する。しかも、マツクイムシ防除も同時に進行できるという考え方は、行政的にも非常に説得力のある内容として受止められ、事業費の $\frac{1}{2}$ 以上の補助金が交付されるほどの事業にまで現在は成長しているのである。

だが、これをマツタケ研究の正道などというにはあまりにも事実は解明されていないのである。例えば、シロの形成率は高まるが、その現象はこれまでの野外観察の結果からの推論を単に裏付けたものであり、実験結果から誘導されたものではない。胞子の発芽から

菌根形成に至るまでの段階については依然としてペールの下にある。また秋季、菌糸から子実体原基が形成され、さらに見事なマツタケに変身する過程についても、いかなる物質がどのような形で関与しているのか、よく分っていないのである。ただ、現実にマツタケが施業の効果として発生してくるものだから「結果よし」ということになる。林業技術として認められても、研究としてはまだまだ完了していないのが現実である。

シロ形成と子実体発生、この現象がアカマツ林との生態的な関係において完全に解明されたならばマツタケの栽培は可能となる。公立林業試験場のマツタケ研究者も、そこに焦点を合せている。既にシロの人工形成については感染苗木法<sup>1)</sup>や胞子播種法<sup>2)</sup>により子実体発生が確認されており、胞子の発芽条件や発芽促進物質についても新たに解明されたことから<sup>34)</sup>も多い。

一方、土壤微生物の員としてマツタケを考え、シロ周辺に生息する微生物を利用した土壤環境調節の考え方<sup>5)</sup>や施業後の土壤微生物相の経時変化調査<sup>6)</sup>さらに固有な放線菌、細菌の抗菌性を利用したシロ形成技術の検討<sup>7)</sup>など、確実にこの分野の研究成果もあがりつつある。民間研究機関においても、詳細はわからないがバイオテクノロジー等も導入した研究が進められていると聞く。このように、栽培化へ向けての展望は明るいのであるが、果して喜ぶべきことであろうか。マツタケの全てが解明された時点で、次に人間はアカマツ林からマツタケを引きずり出すことを考えるはずである。ナメコやシイタケのように……。

日本の森林や林業を守り、育てるのが私達林業技術者の任務である。病めるアカマツ林をマツタケ栽培の場として活用し、地域特産物を育成する。やはりこれがマツタケ研究の正道であると信じたい。

しかし、その研究の行く末が心配なのである。マツタケの研究も長く続けると、本当にややこしくなってくる。

## 引用文献

- 1) 枯木熊人、川上嘉章：マツタケ菌感染苗によるシロの人工形成。広島林試研報 20：13~23, 1986。
- 2) 伊藤武、藤田博美：マツタケ栽培のコストダウン技術に関する研究(Ⅲ)。昭和60年度京都林試業務年報 42~44, 1985。
- 3) 太田明：マツタケ担子胞子の発芽(Ⅰ) 担子胞子の膨潤と発芽に対する有機酸の効果。日菌報27:167~173, 1986。
- 4) 太田明：マツタケ担子胞子の発芽(Ⅱ) 発芽条件の検討と発芽過程の顕微鏡的考察。日菌報27:473~480, 1986。
- 5) 小川真外：マツタケ山造りと微生物相の調節。日菌講24:15~17, 1980。
- 6) 藤田博美外：アカマツ林の環境整備と土壤微生物の変化。日林関西支講32, 1980。
- 7) 下川利之：マツタケ増殖技術に関する研究(Ⅲ) アカマツ林に生息する放線菌及び細菌の抗菌性。岡山林試研報 6:62~85, 1985。

## フェアブルの茸図譜を尋ねて

渡 辺 庸 子

昨年11月、娘のマルセイユ滞在を機に、南佛のフェアブルゆかりの地を巡りました。昔、昆虫記を読んで漠然とあこがれていた南佛でしたが、行く前に伝記を調べると、フェアブルは自然科学全般を幅広く勉強し、616枚にも及ぶ四ツ切り大の茸<sup>\*</sup>の水彩画を残したことを知り、一層興味をそそられました。言葉も茸のことも全くわからぬ者の旅行記であることをはじめにお断り致します。

フェアブルは1823年南佛のアヴェイロン県の一寒村サン・レオンの農家に生まれ、貧困のため更に山奥の一軒家である祖父の許で、家畜と自然以外友達もないと云う幼少時代を過しました。これが、後のフェアブルの自然への鋭い観察眼と深い洞察力を培ったと伝記作者は伝えています。幼少の頃から身近にある茸にも興味をもち、傘の裏の様子から三種に分類していたと記しています。サン・レオンはマルセイユから車で半日余り、黄葉の美しい山中や、石灰岩の荒地、緑濃い林の中を道が交錯してはしる、小さな盆地の底の美しい村でした。生家を記念した博物館を見た後、小雨に煙る黄金色の林や、小川へ下る斜面に降り立つと、沢山の種類の茸がすぐ目につきました。

若い頃は、数学、化学、物理学を勉強し、教職につきましたが、博物学にも深い関心を持ち続けていました。やがてコルシカ島のアジャクシオへ赴任、ここで南佛とは一転した豊かな自然に感動し、調査に訪れた生物学者との出会いから昆虫学へ開眼しました。沢山の植物や貝の標本の大半がコルシカで集められたと聞き、私も急にコルシカへ渡りました。車で南半分を一周しただけですが、アジャクシオから有名なマキを見るために山中へ入る道端や、南下する車道沿いに、カラカサタケや数種の茸を見かけました。南端の港街の宿で、茸を食べたいと頼んだら、イタリア系の陽気な主人は「本土ではよく食べるが、ここではあまり食べない。茸はこわいよ」と大げさに肩をすぼめて見せました。翌朝早く街の市に行ったら大きなシャンピニオン・ド・パリを売っていました。茸の図譜は、後年、教育改革で教職をはなれ、終の棲家としてフェアブル自身が、「アルマス・ド・フェアブル」と名付けたセリニアン<sup>\*</sup>のフェアブル博物館（アヴィニオンの北、オランジュ郊外にあり、パリ国立自然史博物館分館となっている）

に、300枚位が展示されています。ここに落ちついて昆虫の研究に専念していた1885年頃から十年余りかけて画かれたもので、没後散逸し、現在展示されているのが全部であることが誠に残念です。昆虫記に、午前中の日課として茸の水彩画をかくと云う記述があります。大変大切にしている、晩年のフェアブル一家の貧困を救うため、1万フランでアルルの民族博物館に収蔵する話が提案されたのを、一度は承知しながら断っています。褪色を防ぐためにと、うす暗いタングステン光しか灯されていない階下展示室の壁画を埋めつくした美事な水彩画の数々は、一種不思議な別世界をかもし出しています。一枚一枚とても丁寧に画かれていて、何かを語りかけているようです。昆虫の生態や本能について、かたくなな程きびしい姿勢で追求したフェアブルにとって、日毎茸の絵筆をとることは、精神の休養であり、又、自分自身では深く追求出来なかった未知の世界への夢もこめられているような気がしました。

11月15日～17日は、マルセイユ自然史博物館の第25回茸展でした。童話のように可愛いポスターが、地下鉄や街角に貼られ、初日は土曜とあって茸を見るのも大変な程、家族連れで賑っていました。近郊から集められたものが、毒茸は赤い皿、他は白い皿にのせて命名してあるのが、フランスの茸の図鑑の骸骨マークと共に印象的でした。相談窓口もあり、図鑑や、食べ方、見分け方の印刷物など沢山出ていましたが、最終日にはきれいに売り切れていて、買い損ってしまいました。

街の食品店では、セップ（セック）と云って、イグチの一種をうす切りし乾燥したものを売っていて、すぐ水でもどり、バター炊めで賞味しましたが、生のイグチの季節にはおそかったようです。どこのスーパーマーケットにも、セップ（セック）や水煮の罐詰があり、薬局の飾り窓にも、きれいな茸のポスターや模型で食用茸の見分け方を示しているのが目立ちました。博物館の森や、動物の展示にも茸が顔を出していて、日本より、人々の親しみが深いのだろうと想像しながら、学名を覚えていない情なきを痛感した旅でもありました。

(\* 編集部注：“茸”はきのこのこと)

村上 康明

スイスは日本の九州よりも少しせまい面積に26のカントン（州）があり、各カントンが独自の自治を行なっています。大学を含めた教育制度もカントンによって異なります。

ローザンヌ大学はレマン湖畔のローザンヌ市にあり、今年で創立450周年を迎えた歴史の古い大学です。隣接して国立工科大学が建てられているので、ローザンヌ市には大学が2つあることになります。これはスイスでは非常にまれなことです。なぜならスイスには国立2、カントン立7の計9大学しかないからです。私立大学はありません。

私のいる研究室は日本語で言うと理学部生物学科植物分類地理研究所（研究室）で、2人の教授、10人の助手、7人の技官、2人の秘書（半日交替）がいます。専門分野は菌類と植物生態が半分半分です。菌類の教授はキシメジ科の分類学、形態学が専門のクレマンソン先生、助手はキシメジ科ザラミノシメジ属、ウラベニガサ科（テングタケ科）ウラベニガサ属、子のう菌類 Diatrypaceae の分類、シメジ属の遺伝、クヌギタケ属の生理、地衣類の分類などの研究をやっています。私は生態学的研究を行なうとともになるべくたくさんのヨーロッパのきのこを覚えて帰ろうと思っています。当研究室はきのこの研究室としてはヨーロッパで一番まとまったものの一つであると思います。

大学関係では他にチューリッヒ工科大学にホラック先生とミュラー先生、又シャテル大学にケラー先生がおられます。ホラック先生は2年前に来日されたのでご存知の方もいるかと思いますが、ハラタケ目の分類が専門で分厚い本や論文を沢山書かれています。勤務先は大学の博物館です。ミュラー先生は微生物学の教授で子のう菌類が専門ですが、定年退官を迎えられ、後任にどういふ人が選ばれるかは全く不明とのこと。この他ジュネーブの博物館にはモントゥー氏がおられます。

スイスの森林としてはブナとトウヒの混交林または純林が大部分を占め、所々にマツやシラカバやカラマツの林があります。これらの森林の中は日本のように低木やササが群生するということがないので林床がすっきりしていて歩きやすく、きのこも見つけやすいで

す。そのせいかきのこ狩りは大変盛んで、林の中できのこを探す人をよく見かけます。ローザンヌ大学構内にもけっこう広いブナ林やシラカバ林があり、市民の良い散歩道となっていますが、これらの林や芝生に発生する食用きのこはすぐ誰かに「採集」されてしまいます。きのこの柄の根元をナイフで切っているのですぐわかります。逆にその切り口からきのこの存在を発見することもあります。

昨年渡欧された談話会の山中氏からもご報告があったかと思いますが、スイスのアマチュアきのこ会は非常にレベルが高く、同定能力はすばらしいものがあります。採集会ともなると各自顕微鏡と沢山の本を持ち寄り、自分の採集したきのこを同定しています。中には「プロ」のクレマンソン先生よりもきのこをよく知っているという人がいたりして驚かされます。それぞれが自分の「専門分野」を持っており、「このきのこならあの人に聞けばわかる」という声がよく聞かれます。

アマチュアで新種発表をした人もたくさんいます。昨年5月には *Collybia nivalis* というきのこの「発見命名者」に案内してもらって採集してきました。このきのこは一見チチタケのように見え、雪解け直後にしか発生しないという変わった種です。また、「スイスのきのこ」という立派な本がシリーズで出ていますが、この本の著者は2人共アマチュアです。そのうちの1人、ブライテンバッハ氏は工具店を営んでおり、山に専用の研究所を持っています。研究所は2階建てで、1階が台所と食堂、2階が研究室と寝室になっています。研究室には顕微鏡や実体顕微鏡、写真撮影装置などが備えつけられています。もう1人のクレンツリン氏はアメリカ製の大型高級車を乗り回すビジネスマンです。なお、「スイスのきのこ 第3巻」はクレマンソン先生も著者の1人として参加されます。また、国鉄の職員として勤めながらこれまた立派な本を出版した人もいます。

以上、スイスの菌学のあらましを紹介しました。

私がおちらに来て驚いたことが二つあります。一つは本と顕微鏡を使えばきのこの種類がわかるということ。これは一見当り前のことで、「なーんだ」と思われるか

もしませんがそうではなく、これは大変なことです。山からきのこを採ってきて種類を調べてみたことのある人ならわかっていただけだと思いますが、日本には「不明種」、「未知種」がまだたくさんあり、本を見ても出ていない場合が多いのです。ヨーロッパは菌学研究の歴史が古いので分類学が大変進んでいるのです。もう一つは上に述べたことと相反するように見えるかもしれませんが、ヨーロッパにおいてさえわかってないグループが結構あるということです。例えば私と同室のボナーさんが研究しているウラベニガサ属はまだ新種が続々と出てきていますし、従来「ウラベニガサ」

と呼ばれていたものはその中に20ぐらいの異なるきのこを含んでいるそうです。

昨年は200以上の標本を採集することができました。今年も雨が順調に降っている（順調というよりも異常気象で5～6月にかけて2か月間ずっと雨ばかりでした）またたくさんきのこが発生することと思います。面白いきのこがたくさんとれていますので、それらについては次回にご報告したいと思います。私はまだ数年こちらに滞在する予定ですので、ヨーロッパに来られる機会がありましたらぜひお立ち寄り下さい。

## 談話会会員の採集した珍しいキノコ (2)

横 山 和 正

前回報告したテングタケの白色型はシラユキテングタケ（白雪天狗茸）としたいと思います。菅平付近でこう呼ばれているようで、最初にこのキノコを発見した小宮山ゆきちゃん\*（当時幼稚園）にちなむものだと思います。雪の白さも連想されますからピッタリの名前だと思います。

昨年9月に菅平におじゃましたときは、ゆきちゃんはお父さんの運転するジープの助手席にちょこんと座って、少し恥ずかしがりながら、キノコの話をしてくださいました。そのなかで大変印象に残ったことは、ゆきちゃんは『アマニタ・ムスカリア……』と学名で話してくれたことです。私も今回はゆきちゃんにならって、話を進めたいと思います。

私は以前から、形がよく似ているきのこは試薬をつけて、なんとか区別できないものかと思って、きのこの傘、ひだ、柄、肉などに試薬を付けてデータを集めてきました。今回はそのうちの2例をご紹介します。

### 4. アガリクス・エセッティとアガリクス・アブルプティブルプス

従来、日本でウスキモリノカサと言われていたものは、全体がうす黄色で、つばがあり、柄の基部が著しく膨れるのが特徴です。

このきのこの傘の表面にアニリンと硝酸を十字に塗りつける（シュッファー反応とよばれる）と交点が赤くなるものと、ならないものがあります。

顕微鏡的な特徴は両者にはあまり大きな違いはありませんが、ただ前者には緑シスチジアがあり、後者に

はありません。最近ハラタケ属の世界のモノグラフを書いたイタリアのカペリによると；

アガリクス・エセッティ……シュッファー反応 +  
(*Agaricus esettei* Bon)

アガリクス・アブルプティブルプス……シュエ反応 -  
(*Agaricus aburuputibulbus* Peck)

とのことです。

【京都、大津付近のものはすべてシュッファー反応+です（大文字山産+；1987年6月16日、山中高史・稲塚岳博\*\*採集。近江神宮産+；1985年9月24日、横山明子採集。滋賀大学教育学部構内産+；1985年7月11日、横山明子採集）。長野県菅平のものは-です】

日本国内でのこの2種類はどのような分布をしているのでしょうか？

シュッファー反応（Schäffer reaction）はハラタケ属に大変有効な反応です。使用する試薬はアニリンと硝酸です。アニリンは透明な液体で特有の臭があり、有毒です。光と空気的作用により次第に茶色になり、ついに黒くなります。反応に使用するときは透明なアニリンの方がよいようですが、うす茶色のものでも大丈夫です。硝酸は透明な液体で、手に付けたり、飲み込んだりすると、火傷したり、組織が腐食します。長期間蒸気を吸い込んでいると、慢性気管支炎や肺炎になります。このようにどちらの試薬も有毒なので、密封できるふたつきのビンに入れて、使用しないと、危険です。この反応は新鮮な標本と乾燥標本のどちらにも使えますが、私の経験ですと乾燥標本ではうまく反応が出ない場合もあります。古いきのこを乾燥して、組織がこわれた様な場合は一般によい反応が出ないようです。

（\* 会員家族，\*\* 非会員）

## 5. フィロポルス・オリエンタリスとフィロポルス・ベルス

関西の照葉樹林にできるキヒダタケの仲間は2種類あります。学名がフィロポルス・ベルス〔*Phylloporus bellus* (Mass.) Corner〕とよばれるキヒダタケと、フィロポルス・オリエンタリス(\*)です。いずれもマレーシアあたりと共通の種類だそうです。関西の照葉樹林では前者の方がふつうで、かさが褐色、ひだが鮮やかな黄色、肉はうす黄色ですが、きのこを切断して肉が空気にふれると、ゆっくり青変するものがあります。後者はややまれで、かさがあずき色、ひだは鮮やかな黄色、肉はうす黄色ですが切断するとたちまち濃い青色にかかります。

ベルスも古くなると、傘や柄が赤褐色～あずき色になり、オリエンタリスと区別しにくくなります。そんなときにはアンモニアを傘に付けてみます。ベルスは

瞬時に紫色に、オリエンタリスは瞬時に緑色になり区別できます(ピンの口にきのこの傘を近づけて、アンモニアの蒸気をかけてもよい)。またひだに10%硫酸鉄(Ⅲ)水溶液(FeSO<sub>4</sub>)をつけるとベルスはオリーブ色～緑色になりますが、オリエンタリスは変化しないので、両種を区別できます。

1980年9月7日に西宮市広田神社で採集したフィロポルス・オリエンタリスを届けて下さり、筆者の注意を喚起された小林恭子さんに感謝します。また、ドイツ語の発音について種々ご教示いただいた中村皓光先生(京府大)に感謝します。

\*顕微鏡的特徴などから、このきのこは、マレーシアなどから報告されている *Phylloporus orientalis* Corner var. *brevisporus* Corner です。

(1987. VII. 23 記)

## 昭和61年度関西菌類談話会大会報告

(第242回 関西菌類談話会例会)

と き 昭和62年2月7日(土)

14:00 ~ 17:40

ところ 京都府立大学大学会館大ホール(2F)

総会(14:00~15:00)

会長挨拶 本郷次雄会長

議長選出 会長推薦により土倉亮一会員を選出

昭和61年度事業報告、会計報告その他の報告

1. 総務報告 なし

2. 庶務報告(1)上田俊穂庶務幹事より昭和61年度集会について報告があり、了承された。

(イ)昭和61年2月1日(土) 総会ならびに講演会(第232回例会)が京都府立大学大学会館で行われた。詳細は会報No.1に報告済みである。

(ロ)同7月12日(土) シンポジウム「菌類の偶然による進化」(第235回例会)が京都府立大学図書館視聴覚室で行われた。参加者は36名で、演者と演題は下記のとおりであった。

(1)進化について 衣川堅二郎(近畿大, 農)

(2)きのこの多様性について 横山和正(滋賀大, 教)

(3)構成成分について 藤井昭治(京府大, 農)

(ハ)同12月14日(日) スライド大会(第241回例会)が京都市左京区 田中神社弘安殿で行われた。参加者41名、発表者は吹春俊光, 佐藤 理, 田中千尋, 扇 進次郎, 黒柳悦次, 佐々木久雄, 本郷次雄, 山中勝次, 伊沢正名, 岩瀬剛二, 森本繁雄, 山本昌木, 吉見昭一, 横山竜夫, 渡辺庸子, 本多澄夫, 横山和正各会員(順不同)。

庶務報告(2)横山和正庶務幹事より昭和61年度採集会について計画どおり実施されたことが報告され、予承された。

なお、第238回例会は9月21日(日)の予定であったが、世話人の都合で9月23日(火)に延期して行われた。

3. 会計報告(1)岩瀬剛二会計幹事より昭和61年度収支決算について下記のとおり報告された。また、一般会計のほか、特別会計については10万円を小原弘之会員名義で銀行預金とした旨報告があり、それぞれ了承された。

会計報告(2)丸西一枝会計幹事より会員の会費納入実績の報告があり、会費収入実績387,500円と一致することが示され、了承された。

関西菌類談話会 昭和61年度会計決算報告

		昭和62年2月7日		
		単位:円		
[収入]		予算	決算	増減
繰越金		194,080	194,080	0
会費		360,000	387,500	27,500
会場費		30,000	42,000	12,000
雑収入		30,000	78,840	48,840
	寄付金		[40,040]	
	ヒトヨタケ科		[9,550]	
	フウセンタケ科		[10,000]	
	毒キノコポスター		[1,000]	
	235回例会要旨集		[3,300]	
	その他		[14,950]	
収入合計		614,080	702,420	88,340
[支出]		予算	決算	増減
	通信費	200,000	144,510	△55,490
	事務費	30,000	14,250	△15,750
	会場費	50,000	9,500	△40,500

コピー費	50,000	5,070	△44,930
謝礼	42,000	14,500	△27,500
会議費	10,000	12,190	2,190
振替手数料	1,000	830	△170
雑支出	10,000	14,200	4,200
会報印刷費	60,000	60,000	0
会報経費	20,000	8,200	△11,800
別刷代	0	17,400	17,400
予備費	20,000	0	△20,000
支出合計	493,000	300,650	△192,350

〔繰越〕

次年度繰越金	121,080	401,770	280,690
--------	---------	---------	---------

会計幹事 丸西 一枝  
会計幹事 岩瀬 剛二

4. 会計監査報告 高田信男会計監査より、昭和61年度収支決算が公正かつ明確で、疑義がまったくないことを、竹田富久雄会計監査と共に確認した旨報告され、了承された。
5. 編集委員会報告 上田俊穂編集委員長より下記のとおり報告され、了承された。  
(イ)「関西菌類談話会会報 No.1」を昭和61年6月14日付で発行した。変形B5版、8ページ、活版印刷で400部を作成して会員に配布した(内容は省略)。印刷費は6万円。

#### 昭和62年度事業計画、会計予算案、その他の計画案の審議

##### 1. 事業計画

(イ)採集会 横山和正幹事より昭和62年度採集会計画案について提案され、原案どおり承認された。採集会年間計画表は集会計画とともに一括して配布する他、会報にて印刷する。

(ロ)集会 上田俊穂幹事より昭和62年度集会について、昨年度と同様、シンポジウム(11月)、スライド大会(12月)、講演会(2月)をそれぞれ予定している旨の提案があり、承認された。

(ハ)会報発行 上田俊穂編集委員長より昭和62年度の編集計画について説明があり、年2回発行とし、大きさはNo.1と同じとするが活字を小さくして、多くの内容を盛り込むこと、かびやきのこの判り易い記事、講演要旨、事務局報告、例会報告などを主な内容としたいことなどが提案され、承認された。

2. 会計予算案 岩瀬剛二会計幹事より昭和62年度会計予算案が下記のように提案され、原案どおり承認された。

関西菌類談話会 昭和62年度会計予算(案)

昭和62年2月7日

〔収入〕	単位：円
前年度繰越金	401,770
会費(@1,000×360)	360,000
会場費	40,000
雑収入	50,000
収入合計	851,770

〔支出〕	単位：円
通信費	220,000

事務費	30,000
会場費	50,000
印刷・コピー費	50,000
謝礼	40,000
会議費	10,000
会報印刷費	100,000
会報刊行諸経費	20,000
振替手数料	1,000
雑支出	20,000
予備費	20,000
事業準備金(定期貯金)	100,000
支出合計	661,000

〔繰越〕

次年度繰越金	190,770
--------	---------

会計幹事 丸西 一枝  
会計幹事 岩瀬 剛二

3. 役員改選 役員会の推薦により本郷次雄現会長を次期会長に選出することが全会一致で承認された。なお、新会長より次期幹事などの委嘱については会長に一任されたい旨発言があり、了承された。さらに、会長より副会長をおくこともあり得との発言があった。
4. その他 役員数が多すぎるきらいがあるとの発言があり、会長より今後は幹事を減らし、世話人と区別するつもりであるとの考えが示された。また、役員が一般会員の知らないうちに決められているのではないか、規約に問題があるのではないか、会長選挙は会員全員の投票にしたらどうか、などの発言があり、会長より役員を選出はすべて会則に基づいて行われているとの説明があった。また、富士山採集会で自由参加も認めて欲しい、大会・シンポジウムなどで講演要旨は必ずしも書かなくてもよいのではないか、などの意見があった。
5. 次期会長挨拶  
関西菌類談話会は日本菌学会につき伝統ある、実力のある、権威のある会である。現在会員数が非常に増えており、今後会員が結束して本会を発展させるために、会則にのっとってすべての活動を行わなければならないので、種々の面で会員の協力を得たいとの挨拶があった。

#### 講演会(15:25~17:40)

1. ベニタケ属のきのこについて 特に数種の子実体の大きさに関して  
大阪府立高槻南高等学校 下野義人
2. 箱石海岸砂丘のクロマツ林の高等菌類  
兵庫県立相生産業高等学校 山脇誠史・京都市立桃陵中学校 森本繁雄・京都教育大学 土倉亮一
3. 砂浜の海生菌について  
京都教育大学生物学教室 土倉亮一
4. バリ島の幻覚性きのこ コペランディア・シアネスケンスについて  
滋賀大学教育学部 横山和正

〔事務局〕



# 1987年度関西菌類談話会行事計画

世話人氏名 敬称略・順不同

- |   |   |
|---|---|
| <p><b>243回</b> 5月24日(日) 分類学講座(第12回)<br/>         田中千尋(京大・農)『植物の病気とその見分け方』<br/>         京都府立大学学生会館(10:30~12:00)<br/>         昼食後、農場内で採集(13:30~15:00). 糞生菌の採集<br/>         世話人: 藤井昭治・井坪豊明・下野義人・横山和正・伊藤忠義</p> <p><b>244回</b> 7月5日(日) 箕面公園採集会<br/>         阪急電車箕面駅前集合(10:30). マツ林(シイ・カシ林)<br/>         世話人: 上田俊穂・高山 栄・下野義人・竹田富久雄</p> <p><b>245回</b> 7月26日(日) 京大演習林上賀茂試験地採集会<br/>         京都市北区上賀茂本山2 京都大学農学部付属演習林上賀茂試験地事務所前集合(10:30).<br/>         植栽したマツ林他<br/>         世話人: 加藤景生・吉見昭一・田中千尋</p> <p><b>246回</b> 8月22日(土)~25日(火) 富士山採集会(3泊4日)<br/>         世話人: 井坪豊明・森本繁雄・山中勝次・上田俊穂・熊田俊夫・丸西靖恵<br/>         詳細は6月頃にお知らせします.</p> | <p><b>247回</b> 9月27日(日) 鞍馬山採集会<br/>         鞍馬寺山門前集合(10:30). モミ・ツガ林<br/>         世話人: 吉見昭一・橋屋 誠・森本繁雄</p> <p><b>248回</b> 10月18日(日) 大文字山採集会<br/>         銀閣寺北隣の八神社集合(10:30). アカマツ林<br/>         世話人: 田中千尋・相良直彦・丸西靖恵</p> <p><b>249回</b> 11月8日(日) 三上山方面採集会<br/>         滋賀県野洲郡野洲町北桜 森林センター集合(10:30). アカマツ林<br/>         世話人: 太田 明・山中勝次・橋屋 誠</p> <p><b>250回</b> 11月21日(土) シンポジウム<br/>         世話人: 山中勝次・下野義人・岩瀬剛二・伊藤忠義・熊田俊夫</p> <p><b>251回</b> 12月13日(日) スライド大会(10:30~16:00)<br/>         京都市左京区田中樋口町1 田中神社弘安殿<br/>         (TEL 075-781-9274)<br/>         世話人: 森本繁雄・服部 力・井坪豊明・田中千尋・丸西一枝・岩瀬剛二<br/>         各自スライドをご用意下さい.</p> <p><b>252回</b> 2月6日(土) 総会及び大会(講演会)<br/>         世話人: 山中勝次・下野義人・丸本龍二・伊藤忠義・熊田俊夫<br/>         詳細は12月頃にお知らせします.</p> |
|---|---|

---

## 関西菌類談話会会報 No. 2

1987年11月10日 印刷  
 1987年11月14日 発行

**編 集** 関西菌類談話会会報編集委員会  
**発 行** 関西菌類談話会

**発行所** 関西菌類談話会  
**事務局** 〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85  
 財団法人発酵研究所 真菌研究室内  
 電話 06-302-7281  
 振替 大阪 5-83129

**印刷所** 橋本印刷  
 〒600 京都市下京区松原通御前東入下ル

---